

The background of the cover is a painting. It depicts a young girl with long dark hair, wearing a white dress, standing in a dark, textured environment. The painting style is expressive, with visible brushstrokes and a moody, atmospheric quality. The girl is the central figure, and the background consists of dark, swirling colors that suggest a night scene or a dreamlike setting.

北京海棠の街
加藤幸子

新潮社

北京海棠の街

加藤幸子



新潮社版

ベキンカイドウ
北京海棠の街 まち

一九八五年六月二〇日印刷
一九八五年六月二五日発行

著者 加藤幸子
かとうゆきこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一

電話（業務部） 03—二六六—五一—

（編集部） 03—二六六—五四—

振替 東京四—八〇八

印刷 株式会社光邦

製本 加藤製本株式会社

定価 一一〇〇円



© 1985, Yukiko Kato
Printed in Japan

ISBN4-10-345203-X C0093

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

目次

第一章 院子の四季 5

第二章 星空の宋梅里 113

第三章 へしなのへ航海記

装画
高山辰雄

北京海棠の街

——これは日常が

十分冒険でありえた時代の
少女の物語です。

第一章

院子の四季

「日本宿舎」の奥庭にそびえるペキンカイドウの木は、院子（屋敷）の子供たちのたまり場であった。彼らは自分の枝を一本ずつ独占していて、好きなきに鳥のようにそれに止まっては町を見おろした。もちろん本物の鳥たちも子供のいないときにはやってきて、勝手にさえずりを楽しんでた。梢に近い佐智の枝からは、北海公園がよく見えた。夏のあいだは西洋人形の瞳の色をしている北海は、この季節は目ばたき一つしなかった。水面が厚い氷で閉ざされてしまうからだった。裸の枝の合間から、白砂糖を固めたようにラマ塔が輝いていた。

反対側には、複雑な胡同（露地）の網目が、町をとり囲む城壁まで続いていた。途中で突然引き裂かれ、押し広げられた個所が「駐屯地」であった。それは美しい町に生じた、てらてらした火傷の跡のように見えた。「駐屯地」の中で何が行われているのか、正確にはだれも知らなかった。その秘密は町中の民家よりも高い煉瓦塀によって、がっちりと守られていたのである。塀の頂きには切先を空に向けた硝子片が、齒列のように植えこまれ、嘲笑的な光の目つぶしを間断なく放っていた。それは侵入者を嘲笑うだけでなく、実際に傷つけることもできたのである。塀越

しに瘠せた動物の脇腹のように波打つ兵舎の屋根が、連なっているのが見えた。へ日本宿舎の子供たちは全員へ駐屯地へに入ること切望していたが、まだのぞきに成功した者さえいなかった。運のいい子供がたまに、カーキ色の軍服を着た兵隊が出入りするのを目撃した。それもふしぎに出ていくほうの数はずっと少なかった。

「あそこには日本軍がいて、匪賊や敵が来ると追いはらってくれるわ」

母親は簡単に説明したが、佐智はあまり信用しなかった。戦争は三つも高い山を登り降りした向うにあり、町の城内には敵兵の影もなかった。シナの人々は、水牛に似たゆつたりとした動作で、町を歩いていた。

新年を三日も過ぎたのに、ときどき街角で爆竹が鳴り響いていた。そのたびに寒気のために張りつめた空気が振動し、今にもひびが入りそうになった。

へ日本宿舎の子供たちが肩からスケート靴をさげて歩いてくると、いきなり足もとに爆竹が投げつけられて、全員が飛びあがった。

「だれだ！」

中学生の孝雄が、爆竹が飛んできた胡同の奥に向き直って怒鳴った。年中日の射さない谷間のような胡同から、おずおずと小さな二つの顔がのぞいていた。兄妹らしく、新しい空色の綿入れ服をおそろいに着て、しっかりと手を握りあっている。

「何のつもりなんだよう」

孝雄が小孩児（子供）につめよって、文句を言った。二人の小孩児は、まじまじと日本の中学

生を見つめるだけで、口をきかなかった。

「孝ちゃん、もう行こうよ。遅くなるぜ」

六年生の健が、背後からなだめるように声をかけた。健はどんなけんかも好まないのである。

「待てよ。こいつらに日本流のあやまり方を教えてやるんだから」

元班長の孝雄は、今の班長にそんなことを言われてむきになったのかもしれない。彼は手を伸ばすと、自分よりずっとチビの女の子の頭を乱暴に押し下げてお辞儀を試みさせた。少女が泣き出すよりも早く、兄の少年は飛び出して、孝雄の手に噛みついていた。

「いてえっ！」孝雄は叫んだが、さすがに中学生らしくもう片方の手で、少年の綿入れの袖を掴んだ。

「健、こいつのポケットから爆竹をとれ！」

すでに胡同の奥に逃げこんだ妹を追おうとする少年ともみあいながら、孝雄は命令した。「早くしろよ」

彼は興奮のあまり真っ赤になっていた。健は困りはてた様子であたりを見まわしたが、洋一も佐智も晋も呆然と立っているだけだった。もみあいがいだいにひどくなれば、孝雄はついに撲りはじめるだろう、とだれの目にも映った。健は心を決めて、暴れている猫みたいな小孩児にのしかかり、上衣から残りの爆竹を抜きとった。十連発が四束もあった。

「孝ちゃん、とったよ。放してやんな」

「他媽的、他媽的！」

小孩児は日本の子供たちを指さすと、地団太を踏んだ。破れた袖口をヒラヒラさせ、涙と涙の

混じりあつた液体を地に滴らせた。

「你們是^{ニーマン・シー・シャ・オトル・ターマレデ}小偷、他媽的！」

「何言つてゐるんだろ、あいつ」洋一が心配そうな声を出した。「言いつけられたらどうする？ 健ちゃん」

「大丈夫だよ」さつさと歩き出しながら孝雄が言った。「こいつは戦利品だ。おまえらにも分けてやるよ」

でもだれも爆竹を受け取る気にはなれなかった。へ日本宿舎の門の前で、孝雄は皆に分配しようとしたが、それぞれに理由をつけて断わってしまった。孝雄はかんしゃくを起こして「よし見てろ」と言うと、四束全部に同時に火をつけた。青空が吹き飛んで、粉々にくだけ散った。近くの街路樹から、いっせいに雀が鉛の弾丸のように飛びたつた。まわりの家々の門が開いて、シナ人たちが口々にわめきながら顔を出した。一瞬、驚愕のあまり硬直した子供たちは、朱ぬりの扉を押し開けて我先に内部に駆けこむと、さよならも言わずに別れてしまった。

へ日本宿舎には、院子（庭）が三つもあつた。朱塗りの門に続く前院と、佐智や孝雄の住む里院と、ペキンカイドウのそびえる奥の后院である。それぞれの庭は屋根のある回廊でつながっていて、子供たちはどこの院にも自由に出入りすることができた。戦争が始まって、日本人の教職員官舎として接収される前は、シナで指折りの大商人の邸宅だった。その商人は、春になるとたくさんの駱駝を集めて西方に旅だたせたそうだった。駱駝の背には腕輪や首飾り、陶器やアンペラが山と積まれてあつた。半年後に隊商はよれよれになつて戻ってきた。それでも駱駝たちはべ

しゃんこになったこぶの谷間に、発酵茶やチーズや羊の毛皮を、行きと同じくらい満載していた。佐智はときどき夕暮れが院子全体を浸す時刻に、大勢の獣たちの鼻息や足踏みを聞くことがあった。日本人に国と同じように家も占領されたその商人や家族たちや十数人もいた召使いたちは、どこに行ってしまったのだろうか。佐智はたいへん気になったが、だれも教えてはくれなかった。

佐智が前院を通りぬけて自分の家に駆けこむと、エアデル犬の〈鉄〉がすかさず跳びあがって、体当りをした。

「鉄、よして、よしなさいってば」

佐智は悲鳴をあげたが、〈鉄〉は主人の少女にのしかかり、熱い息を吹きかけながら、露出しているあらゆる部分をなめ回した。〈鉄〉と三年生の佐智はほぼ同じ体格で、油断をするといつてもこういう目に会った。ようやく犬が親愛の表明を終えたので、佐智は立ちあがった。〈鉄〉は今度は切り株のような尾を振って佐智を眺めていた。

「スケートどうだったの？」

その場を笑いながら見ていた母親がたずねた。紺サージのズボンに、肘に継ぎの当たった男物の上衣を引っかけている。教職員官舎のどの女たちも、大差のない服装をしていた。佐智もズボンに上っ張りである。

「面白かったよ」と言いながら、探るように母親を見た。どうやら表の爆発音は、院子の奥までは届かなかったらしい。

「北海の向う岸まで滑っていったの。でも晋ちゃんはずっと待ってたわ」

「未来の学者は運動が苦手なのね」

自分で言つて、母親はぶつと吹きだした。よく笑う人で、娘にはその原因がわからないことがある。

「晋ちゃんは学者になんかならないの。大工さんになるんだって」

「へえ」と母親はおかしそうに言つた。「中西先生は何て思ふかしら」

中西晋の父親は有名な東洋歴史の学者だそうだ。長男を皮切りに、三人の下の子供にも興亡したシナの国名を片っ端からつけていった。佐智の父親は感心していたが、佐智にはほかの名前を考えるのが面倒だったからとしか思えない。晋ちゃんの父親は、それ以外は息子や娘のことなどこれっぽちも考えているようには見えないのだ。

中西晋が教室で大工になると宣言したとき、同級生たちはわつと笑いだし、小田切先生は明らかに気に入らない顔をした。小田切先生は女の先生なのに、男の子が兵隊以外の仕事を志望することに耐えられないのだ。でも晋ちゃんは、大工になって、焼けたり壊れたりした日本の町を建て直したいと本気で考えたのだ。その情報源は東京にいる彼の祖母からの便りであった。彼女は今年の板子一枚下は地獄の乗物に乗って遠くの国に行くのはごめんだと言つて、たった一人で留守番をしているのだそうだ。

「外で遊んでくる」

佐智はふきげんをあらわにして母親に告げた。母親のほうは気づかずに「あら、じゃお八つ」と言つて、木綿で作ったお八つ袋を渡した。のぞいてみると、乾パンが十個と緑と赤の金平糖が一個ずつでがっかりした。ときには手作りの蒸しパンやカルメ焼きのときもあるが、西^シ単^ダの露店

で売っている油炸果や焼餅が入っていることはぜつたにない。市場の群集よりも数の多い、黒や金緑色の蠅のせいだ。ヘシナの蠅は人に馴れてるのね」と母親はぞつとした声で言っていた。点^{ダイ・エン・シ}心の表面に黒豆のようにたかった蠅たちは恍惚として動かず、店主はときどきひよいとその片翅をつまんで放り出すだけだった。佐智は小孩児や苦力たちが、平然と蠅つき菓子、菓子をぱくつくのを見てうらやましかった。へ蠅がたかるほど旨い」と彼らは信じているのにちがひなかった。佐智の母親は市場で買ったものには、何でも火を通した。官舎で赤痢が出たときも、彼女の家族がかからなかったのはそのせいだ、と自慢していた。

へ鉄がじーっとお八つ袋の動きを見守っている。扉の前に立ちふさがって、お八つ袋が外に出るのを防いでいる。佐智は仕方なく、乾パンを一個放ってやった。上下の巨大な顎があむつと開いて、乾パンは桃色の苔におおわれた暗い口中を滑り落ちていった。へ鉄は唇をめくって、首をかしげた。常に空腹の大型のエアデル犬にとっては、それは胃袋の一点を刺激されたにすぎないであろう。佐智は全ての乾パンと金平糖を公平にへ鉄の胃袋と分けあう破目になった。

佐智がやつとへ鉄にもう乾パンがないことを納得させて外に出ると、前院の三島夫人が太った体を小刻みに揺すりながら歩いてきた。佐智は三島夫人も、双子の娘の京子と浅子もあり好きではないが、なぜか夫人はしじゅう佐智の母親のところに話しこみになる。三島氏は市立大学の附属病院の先生で、佐智が百日咳で衰弱したとき栄養注射をしてもらった。母親が三島夫人と仲よくするのは、そのせいかもしれない。

「あら、サツちゃん」三島夫人は出会い頭にいきなり言った。「嬉しいでしょ」面くらった佐智がきよんとしていると、「明日、へ駐屯地」で餅つきがあるんですって。官舎の全員がお招ばれ

したのよ」と言った。

三島家には「日本宿舍」唯一の電話があるので、外からの伝言の連絡所のようになっている。「ねっ、あこがれの「駐屯地」に行けるのよ。嬉しいでしょう」

三島夫人が顔をのぞきこむと、母親からは嗅いだことのない夜来香イユライシャンの花の香りがした。「私の家には病氣の人からの贈り物がどっさりあるの」と浅子が自慢したのを思い出した。「物置きの中に石けんや紅茶やお米がしまつてあるわ。ヒジョージに備えてるのよ」でもヒジョージが具体的にどういふことかは、佐智にも双子にもさっぱりわかつてはいなかったのである。

三島夫人が自分の家に入っていくのを、佐智はまごつきながら眺めていた。「駐屯地」が侵入者を硝子の歯で嚇しながら、一方では相手を招き寄せる意味がわからなかったのだ。彼女は親友の意見をききたくて、后院に通ずる回廊を駆けだした。

「行ってみればわかるよ」

中西晋は、興奮した佐智に向つて、例のとおりのおんびりした調子で言った。

佐智の母親は餅つきの準備を手伝うために、他の女たちといつしよに朝早く行つてしまった。佐智と父親は、官舎のどの家族よりも遅れて出発をした。佐智のほうは「早く、早く」とせかしたのだが、父親はなぜか気が進まないように見えた。彼はぐずぐずと「駐屯地」の前方に広がる野原の中にかがみこんで、オオカマキリの産みつけた泡のような卵塊を娘に示したりした。「へこんだときに！」と佐智はいらいらし、わざとそれを無視した。父親はがっかりし、頭をふつて、歩きだした。近づくにつれて、煉瓦塀の硝子片はまともに見つめていられないほどきらめいた。